

東京学芸大学 先端教育人材育成推進機構外国人児童生徒教育推進ユニット

研修「多様性が活かせることばの教育2025」



研修 **A** 多様な言語的文化的背景をもつ 高校生のための学習環境づくり

2025年8月3日
10:00 - 12:30
オンライン開催

第**3**回 学習環境としての リソース(人工物)のデザイン

本資料の利用について

教育・研修を目的とした利用に限ります。資料としてご利用を希望する場合は、コンテンツの出典として「利用する資料等の作成者・執筆者」「利用する資料等が作成・公開された事業名」「コンテンツが示されているウェブサイトのURL」を明記して利用してください。部分的な切り取りや加工をして利用することは禁じます。

研修A 多様な言語的文化的背景をもつ高校生のための学習環境づくり

第3回 学習環境としてのコミュニティ（共同体）のデザイン 趣旨説明

齋藤ひろみ（東京学芸大学）

2025年8月3日（日）
10:00-12:30

東京学芸大学 先端教育人材育成推進機構 外国人児童生徒教育推進ユニット
研修「多様性が活かせることばの教育2025」

確認（第1回研修資料より） 学習環境

山内祐平（2020）『学習環境のイノベーション』ミネルヴァ書房

社会の変化（不安定・不確実・複雑性・曖昧性）に学習目標は変化
高度な読み書き・計算・教科の知識の習得
⇒コンピテンシー（〇〇するための力）、非認知能力を重視
「自律・協調・問題解決」を基盤とした学習へ

環境との相互作用を通じて能動的に学習（知識形成）

物理的学習環境

A 空間 学校や教育施設の教室、学習のためのスペース（机・椅子・書架などの配置も）	B 人工物 （教材・教具） 筆記具・実験装置等の道具、ネット上のコンテンツ・システム、視覚表現形態等
--	--

社会的学習環境

C 活動 学習者にとって意味をもつ行為のまとまり、活動は連鎖的につながりシステム化を構成	D 共同体 （コミュニティ） 目標を共有する人々のつながり。主体的参加により構成された集団。アイデンティティ確立の過程で学習が生起
---	---

確認 活動・リソース（人工物）のデザイン

活動

- ✓ 生徒の**共感的理解**を土台にした活動
生徒にとって意味のある行動可能な課題
- ✓ **探究し創造**する活動
- ✓ **協働し、課題を遂行**する活動

教材・教具 ≠ 教師が教える内容を提示・練習させるための材料・道具

- ✓ 日本語を理解し・知識を得る＋
学習者は教材・教具に能動的に働きかけられる教材・教具
- ✓ 新しい意味や価値を見出せる内容を含む教材・教具
- ✓ 活用して新しいものを制作・創造できる操作性をもつ教材・教具



そのためにも

- ・ 学習環境の**他の3要素との包括的な検討**が必要
- ・ 教育者による上記を意図した計画・デザイン・支援が重要

学習環境としてコミュニティと言語教育のリソース

環境との相互作用を通じて能動的に学習（知識形成）

物理的学習環境

A 空間

学校や教育施設の教室、学習のためのスペース（机・椅子・書架などの配置も）

B 人工物

（教材・教具）
筆記具・実験装置等の道具、ネット上のコンテンツ・システム、視覚表現形態等

社会的学習環境

C 活動

学習者にとって意味をもつ行為のまとまり、活動は連鎖的につながりシステム化を構成

D 共同体

（コミュニティ）
目標を共有する人々のつながり。主体的参加により構成された集団。アイデンティティ確立の過程で学習が生起

言語教育のリソース

物的リソース
（教材・教具）

人的リソース

社会的リソース

コミュニティ(共同体)を学習環境として捉えなおす

外国人生徒等が、支援を受ける、助けてもらうだけではなく

→ 一員として、コミュニティの目的・目標の達成のために、主体的に責任を持って行動することを通じ、社会的なアイデンティティを形作るとともに、その過程で、日本語・母語等で対話し、社会参加のための知識や行動力を身に付けられる。

★コミュニティでの能動的な相互作用を通じて学ぶ

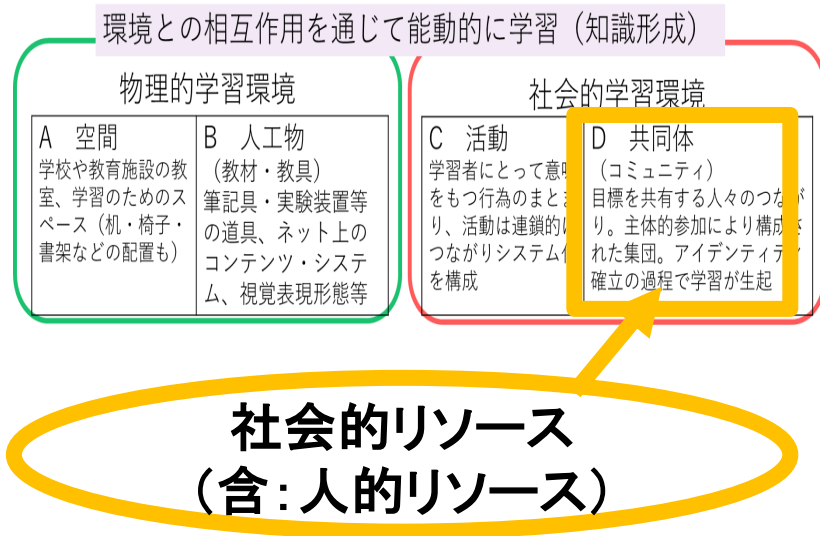
ねらいとする資質・能力

文部科学省

「外国人児童生徒等教育を担う教員の養成・研修モデルプログラム開発事業」の「豆の木モデル」（日本語教育学会2019）にもとづき、下表の資質・能力の向上を目指して、各回のテーマ及び内容を設定し、目標を具体化して、研修を実施する。

第1回	捉える力	エ 認知面の力と教科などの学力を年齢的な発達や学習経験を考慮して捉えることができる。 ク 子どもがどのような自己像を描き、どのように社会参加し自己実現ができるかを、社会の変化とともに展望することができる。
	育む力	セ 学校内外の生活・学習に結び付けて、日本語や教科の指導・支援、内容と日本語を統合した指導・支援をすることができる。
	変える力	ヒ 子どもが自身の多様性を支援にして活躍できる教育を実施し、多文化共生を促すことができる。
第2回	捉える力	ウ 子どもの言葉の力を、日本語と母語の両言語を視野に入れ、言語能力の多面性に留意して測定したり評価したりすることができる。 ク 子どもがどのような自己像を描き、どのように社会参加し自己実現ができるかを、社会の変化とともに展望することができる。
	育む力	ス 子どもの日本語の力を考慮して教材等を選んだり作成したりしてリソースを準備し、学習参加を促すことができる。
	変える力	ヒ 子どもが自身の多様性を支援にして活躍できる教育を実施し、多文化共生を促すことができる。
第3回	捉える力	キ 子どもの暮らしを地域の多文化化や外国人住民支援の状況に関連付けて把握することができる。 ク 子どもがどのような自己像を描き、どのように社会参加し自己実現ができるかを、社会の変化とともに展望することができる。
	育む力	サ 子どもの母語、母文化、アイデンティティを尊重し、学級・学校・地域における社会参加を促すことができる。
	変える力	ハ 外国人児童生徒等が地域にもたらす影響を多様性として肯定的にとらえられるように、マジョリティである受け入れ側に働きかけることができる。

まとめ 学習環境としてコミュニティをデザインする



期待されるコミュニティのデザイン
生徒が周囲の社会集団の支援を受けるのみならず、その一員として相互作用的に関わり、問題の解決のために主体的に責任を持って行動できるよう、集団として取り組む課題と目標、活動の場と関係、課題達成のプロセスをデザインする。
★学習環境の他の3要素と包括的にデザインを

- ◎経験や学習で培ってきた力、多様性・個性・関心を活かせる
自己肯定感・自己有用感・自律性を得る：学習への動機付けに
- ◎学び方を学ぶ ⇒ 自律的な学び手に
- ◎仲間と活動に参加し課題遂行のために日本語（母語等）を使う
他者・社会と関わり・問題を解決するためのことばの力を高める

グループワーク 11：45ー12：10（25分）

「生徒が能動的に相互作用をするコミュニティについて」

1 グループ(ランダム 5人程度)に分かれて、次の活動を行ってください。

① 自己紹介一人1分(活動している場所と名前)

★進行とメモを取る人を決める（パドレットにメモ）

<https://padlet.com/shiromi20110126/a-3-2025-8-3-11-45-12-10-s43d77zyivq2eixc>

② 生徒のコミュニティでの活動について、紹介し合う。

- ✓ 生徒たちが、教室以外のどんなコミュニティで過ごしているか。
- ✓ そのコミュニティの目的・目標のために、生徒は問題解決や課題遂行に主体的にかかわっているか。そこで、日本語として何を学び、多様性や持ち味をどう発揮しているのか。(具体的なエピソードをご紹介ください。)
- ✓ そのコミュニティ自体に、かれらの参与による変容があったか。



Tokyo Gakugei University



第3回 学習環境としてのコミュニティ（共同体）のデザイン

～生徒の主体的な学びとキャリア形成を促すために～

宮城教育大学 教育学部

国際教育研究領域 市瀬智紀

ichinose@staff.miyakyo-u.ac.jp



本日の講話の主旨

これまで、日本語指導担当あるいは一般の教科担当の教員が、外国人生徒のいる高校の教室で教えるとき、どのような配慮や支援をしたらよいのかについてはこれまで何度か検討してきた。

- 1. 足場架け（スキャフォールディングス Scaffoldings）
- 2. フォーカス・オン・フォーム（Focus on form）
- 3. リライト（Rewrite）の種類と方法
- 4. 母語の活用方法



本講の内容は、日本語の知識・技能の獲得について、教員が日々地道に努力していることを前提としたうえで、共同体（コミュニティ）と関わり、言語学習をどう社会的学習環境に開いていくかについて考察することを目標にしている。

従来の日本語教育のアプローチでは実現できていないこと

主体性？

コンピテンシー？

AGENCY
エージェンシー？



日本語基本文型



教科内容



ペアワーク
(隣の人と)



グループワーク
(教室内の他者と)



シミュレーション
(教室外のこと
に)



プロジェクトワーク
(教室外で活

協働？

能動的？

自己肯定感？

必要とされるコンピテンシー

『非認知的（社会情緒的）能力の発達と科学的検討手法についての研究に関する報告書』
平成29年（2017年）3月 研究代表者 遠藤 利彦（国立教育政策研究所 総括客員研究員）より抜粋

自己	自他関係
自己認識 自己効力感 自尊感情	アタッチメント
レジリエンス 忍耐力	共感性・向社会性
エンゲージメント	ソーシャル・スキル

学習者の母語 や母文化・出身 背景を大切に する。

このような配慮は、生徒の
「自尊心・自尊感情」に良い
影響があると考えられる
が...

教科の学習において、外国人生徒に関連ある単元や項目を最大限に活用する。

高校日本史 「朱印船貿易」

- 日本人の海外進出に対しては、これを統制するため、幕府は渡航を許可制とした。幕府からの渡航許可証である朱印状を得た朱印船が、ルソン・アンナン・タイ（シャム）などへ渡航し活発に貿易を行った。
- 貿易の活発化に伴って、東南アジア各地に形成された、海外移住をした日本人の居住地日本町。プノンペン（カンボジア）・アユタヤ（タイのアユタヤ朝）などに作られた。
- ⇒教室のフィリピン、ベトナム、カンボジア出身の生徒に寄港地の地理を確認してもらい、当時の王朝について調べて発表してもらう。

次のうち最も高い（異文化間の）向社会性・ソーシャルスキルを求められるのはどれでしょうか。順番にならべてください。

☐ 取り出し教室（日本語クラス）で日本語能力検定試験対策（〇×）をする。

☐ クラス（母学級）で日本人の生徒と教科の授業を受ける。

☐ 日本語クラスの学習成果を外国人のクラスメートに向けて発表する。

☐ 日本語クラスの学習成果を日本人生徒に向けて発表する。

☐ 日本語プロジェクトで日本人生徒にインタビューする。

☐ プロジェクト学習で日本人生徒とともに他者に向けたインタビューをする。

☐ クラスで日本人の生徒と協働で探究活動や課題解決型学習（PBL）を行う。

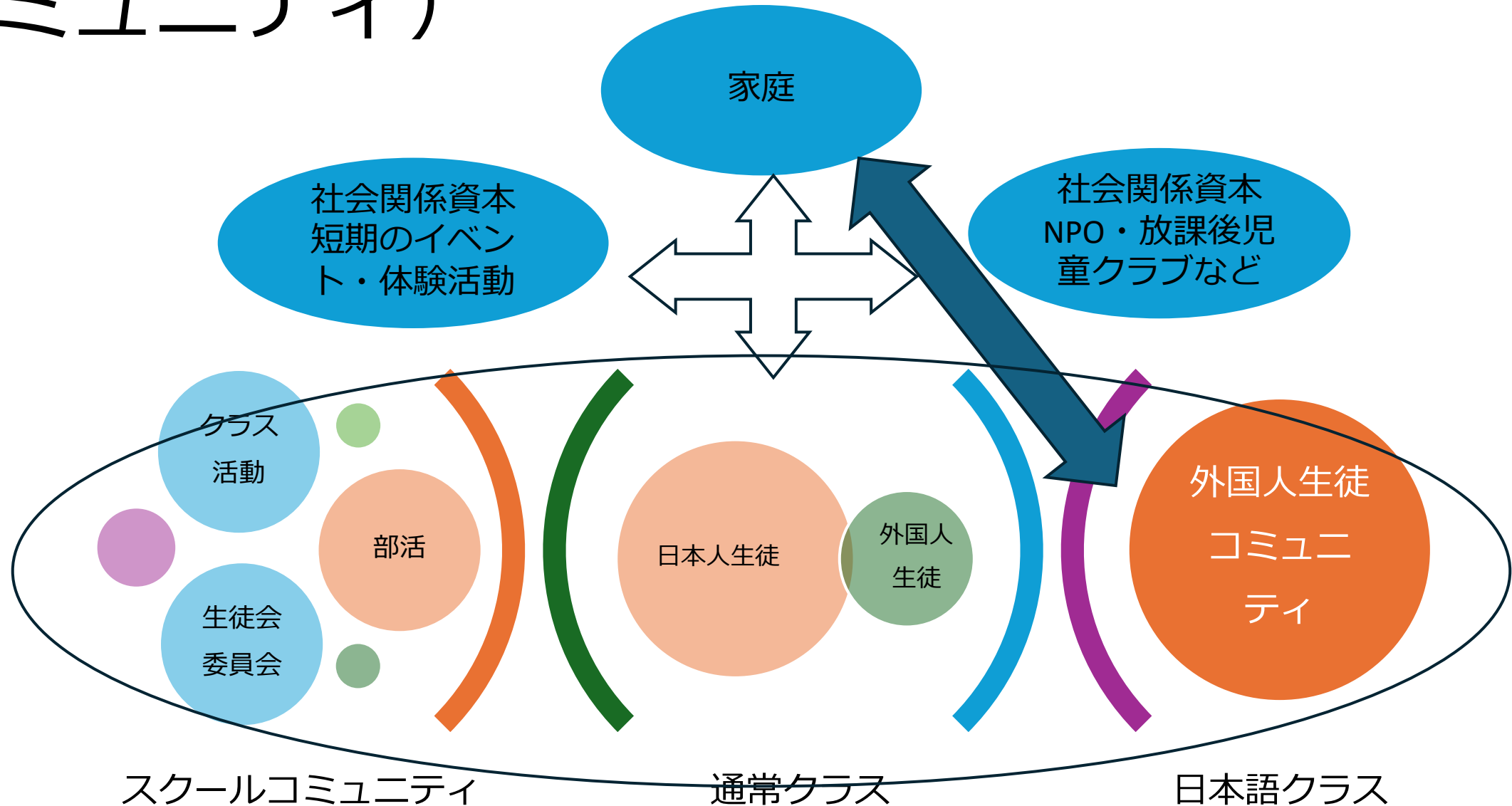
☐ クラスで日本人の生徒と協働で行った課題研究の成果を発表する。

向社会性・ソーシャルスキルを 培う活動

- ・ ☑日本語プロジェクトで日本人生徒にインタビューする。
- ・ ☑プロジェクト学習で日本人生徒とともに他者に向けたインタビューをする。
- ・ ☑クラスで日本人の生徒と協働で探究活動や課題解決型学習(PBL)を行う。
- ・ ☑クラスで日本人の生徒と協働で行った課題研究の成果を発表する。



高校生にとっての社会的学習環境（コミュニティ）



異文化適応の4タイプ (Berry, J.1997 ベリー)

統合 (Integration)

自分の文化を保持しながら新しい文化を取り入れていく態度

同化 (Assimilation)

自分の文化の保持をせずに新しい文化に適応していく態度

分離・離別 (Separation/Segregation)

自分の文化を維持し新しい文化との関わりを避ける態度

境界化 (Marginalization)

自分の文化の保持もせず新しい文化への適応にも無関心である態度

異文化適応とエスニックコミュニティ

- サードカルチャーキッズ (Third Culture Kids)
- 文化の「境界空間」を生き、新しい見方、考え方、行動をする子供 (Pollock, David C, 2004)

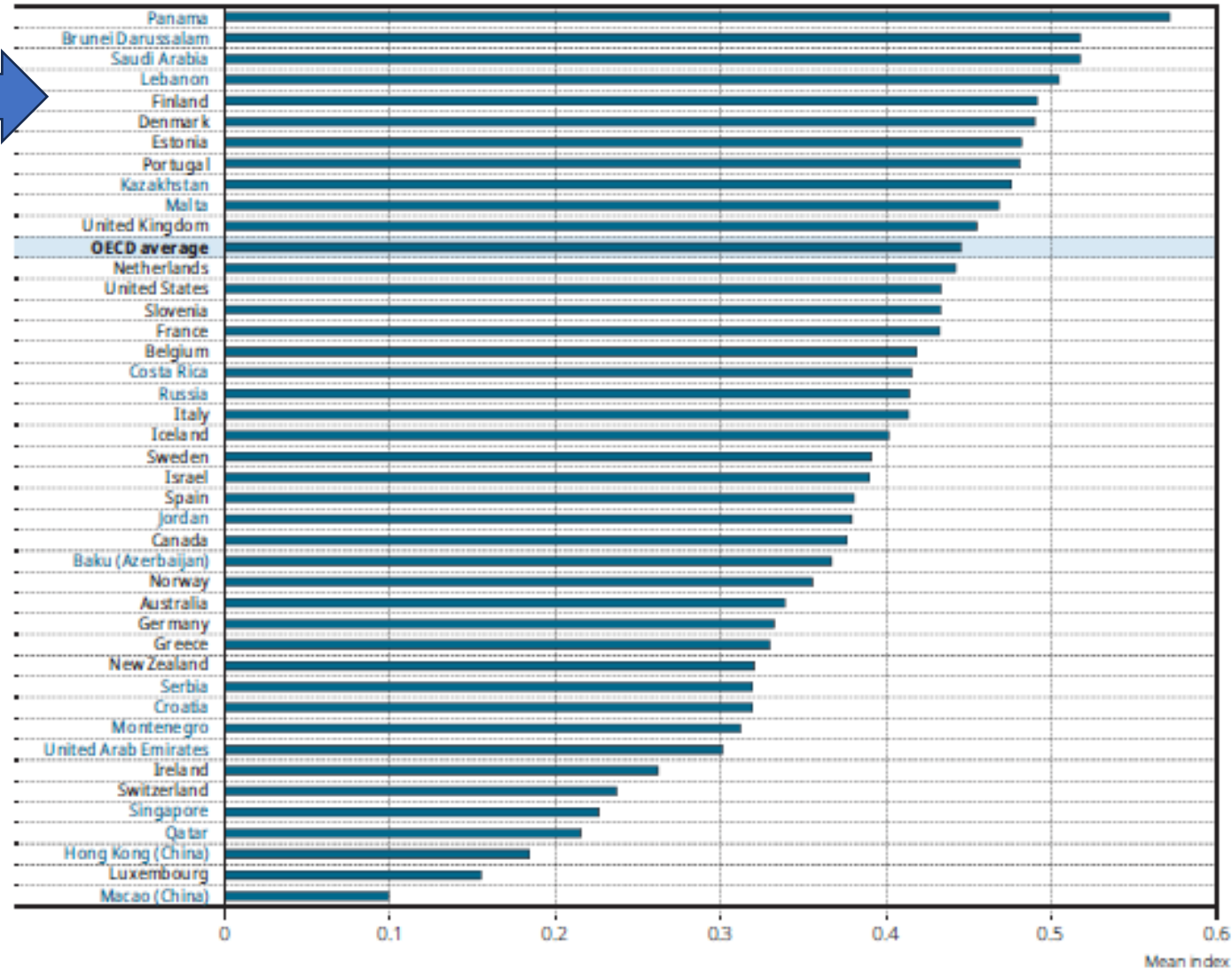
	外見が異なる	外見が同じ
周囲にエスニックコミュニティなし	同化が周囲によって繰り返し否定。 ⇒自分の文化の保持もせず新しい文化への適応にも無関心	同化傾向が顕著 ⇒自身の母文化・家庭文化を否定
周囲にエスニックコミュニティあり	分離・離別 ⇒自分の文化を維持し新しい文化との関わりを避ける	分離・離別 ⇒自分の文化を維持し新しい文化との関わりを避ける

異文化適応の4タイプ

- ㊦成績も優秀で自分の出身国や文化の話も進んで紹介する生徒。
- ㊦出身背景について語ることはなく、完全に日本人グループに合わせようとする生徒。
- ㊦出身国の生徒でグループになり、日本人の生徒とかかわろうとしない生徒。
- ㊦何事にも無気力で、関わりを持とうとしない。授業で出身地域の話題を向けても反応ない生徒。
- ⇒参加者のみなさんの学級・学校の生徒はどのような状況あると思いますか？

Figure II.9.8 Segregation of immigrant students across countries

Index of isolation of immigrant students in school



OECD(2019)では、移民の生徒だけの学校・教室空間が形成されているケースをSegregation of Immigrant Students in Education Systems（学校システムにおける隔離）として言及している。

Notes: Countries where less than 5% of students had an immigrant background are not represented in the figure.

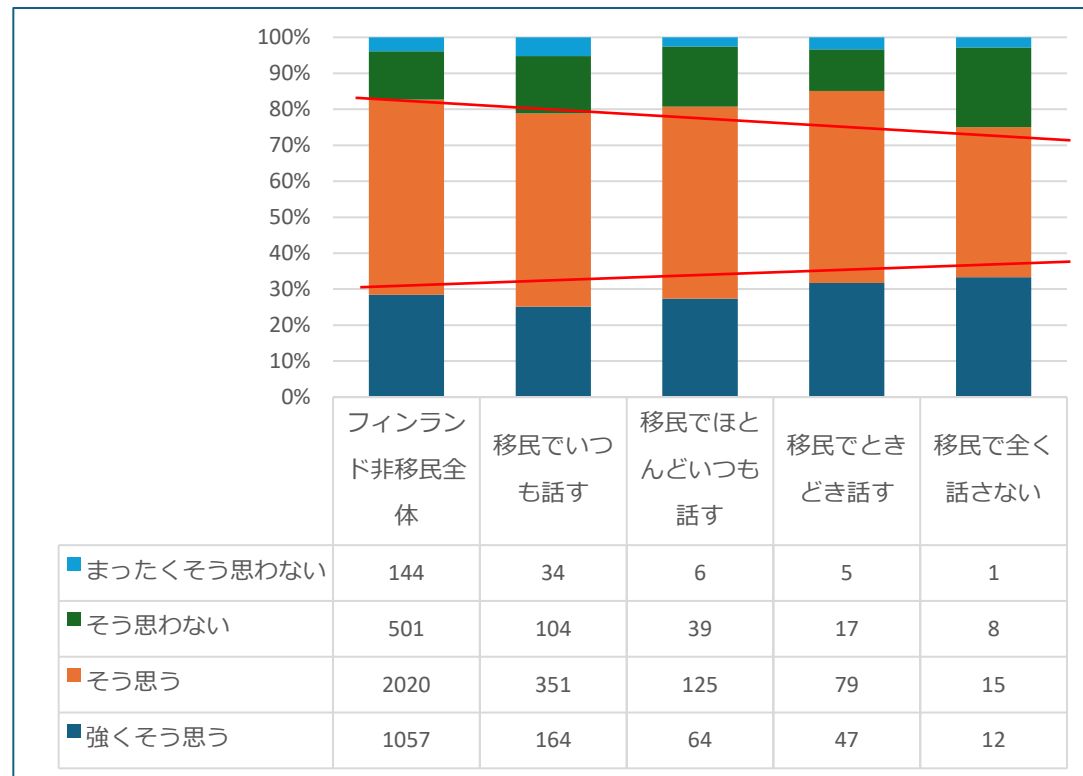
The isolation index measures whether immigrant students are concentrated in some schools. The index is related to the likelihood of a representative immigrant student to be enrolled in schools that enrol not immigrant student. It ranges from 0 to 1, with 0 corresponding to no segregation and 1 to full. Countries and economies are ranked in descending order in the index of isolation.

Source: OECD, PISA 2018 Database, Table II.B1.9.11.

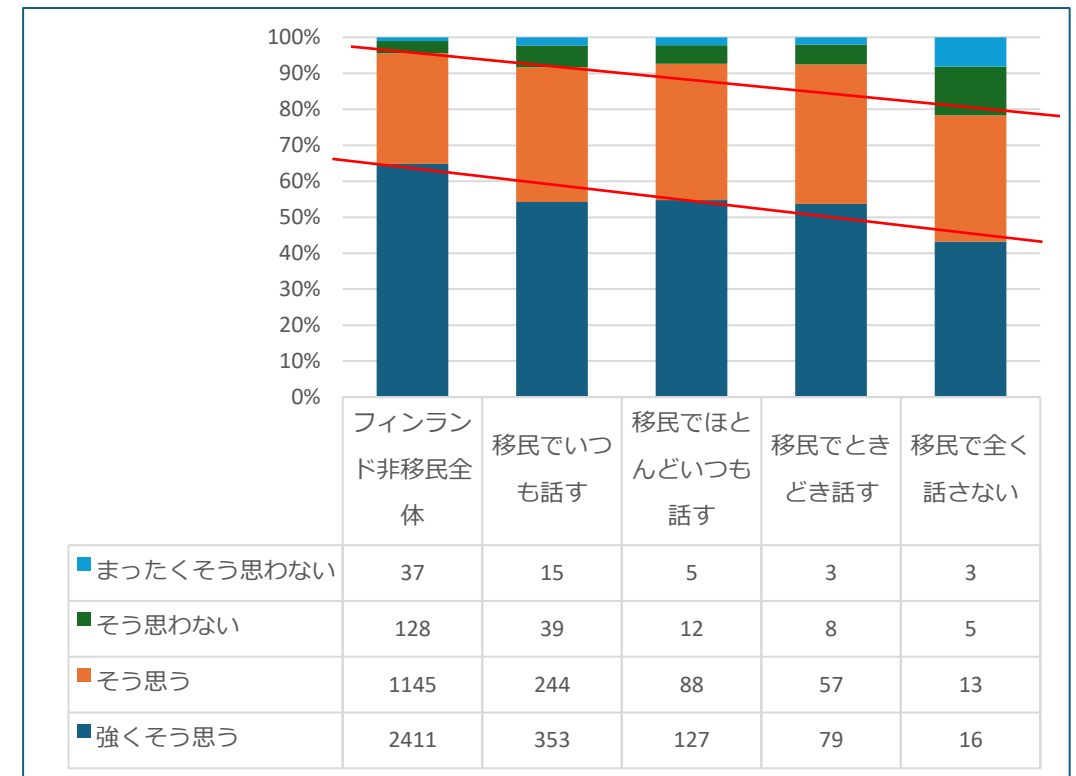
StatLink  <https://doi.org/10.1787/888934038362>

国際数学・理科教育調査TIMSS 調査結果 移民子弟の包摂とWell-being フィンランド

a) わたしは学校にいるのが好き
(Preferable 好意)

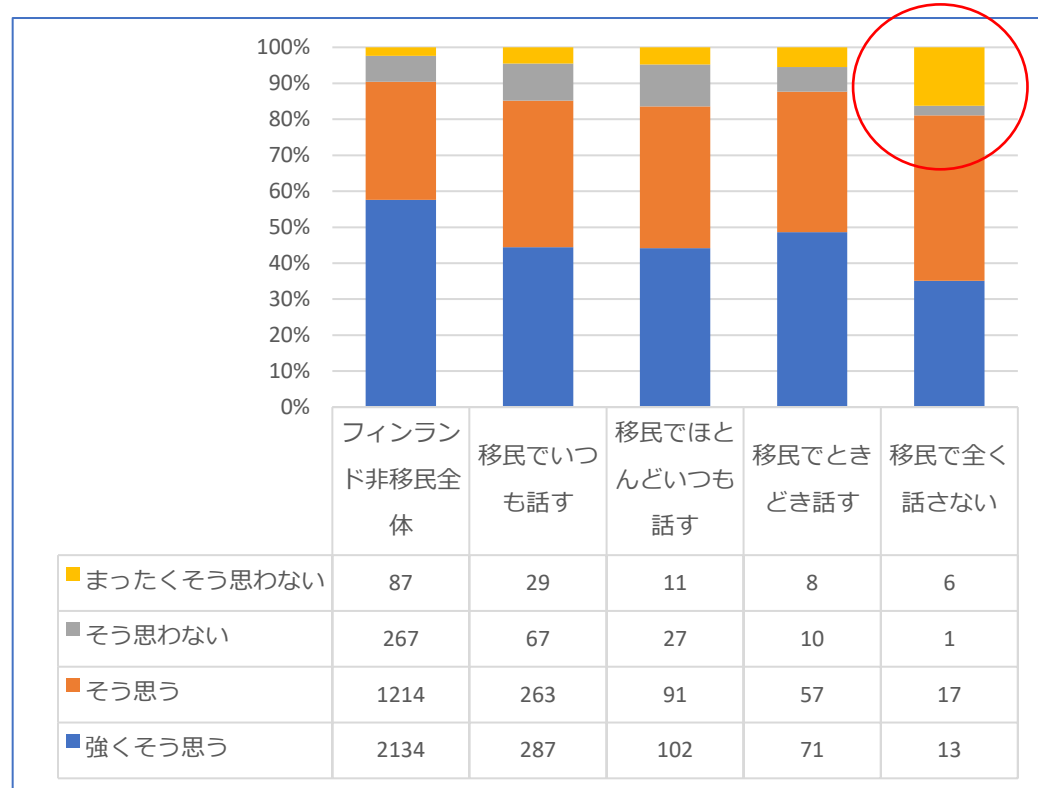


b) わたしは学校にいると安心できる
(Safety 安心感)

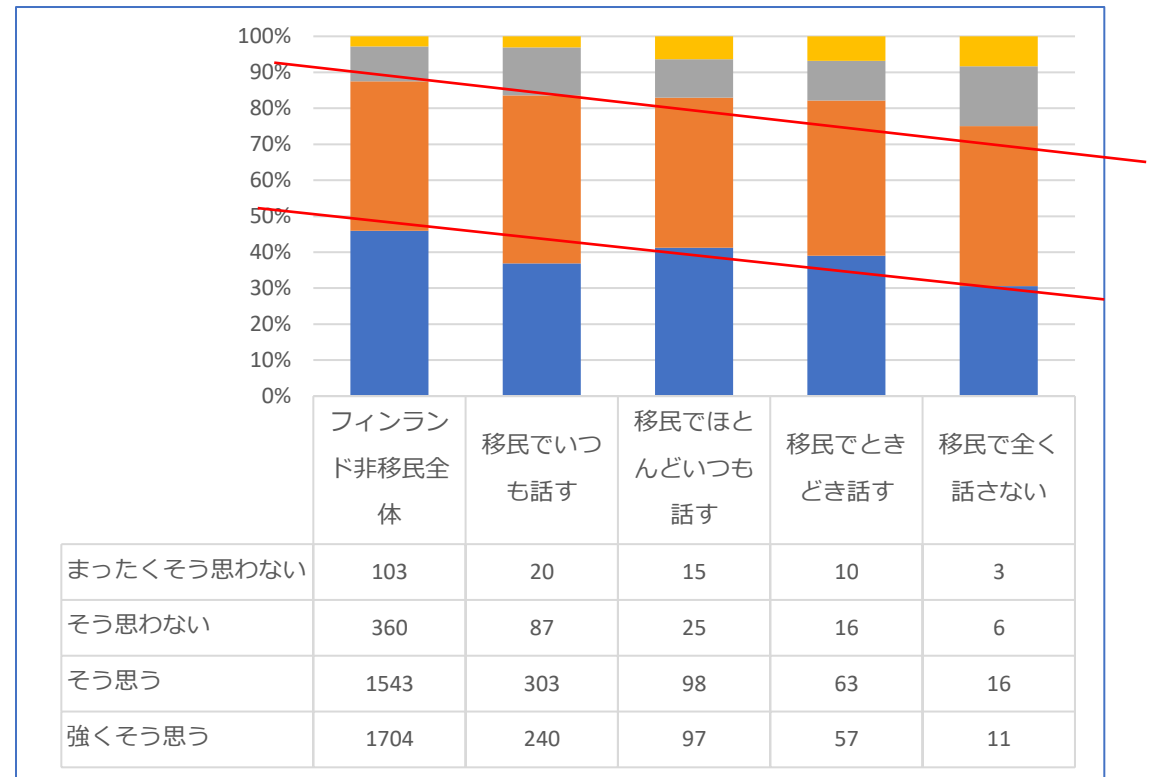


国際数学・理科教育調査TIMSS 調査結果 移民子弟の包摂とWell-being フィンランド

c) わたしは学校に受け入れられていると感じる(Belongings 帰属包摂感)

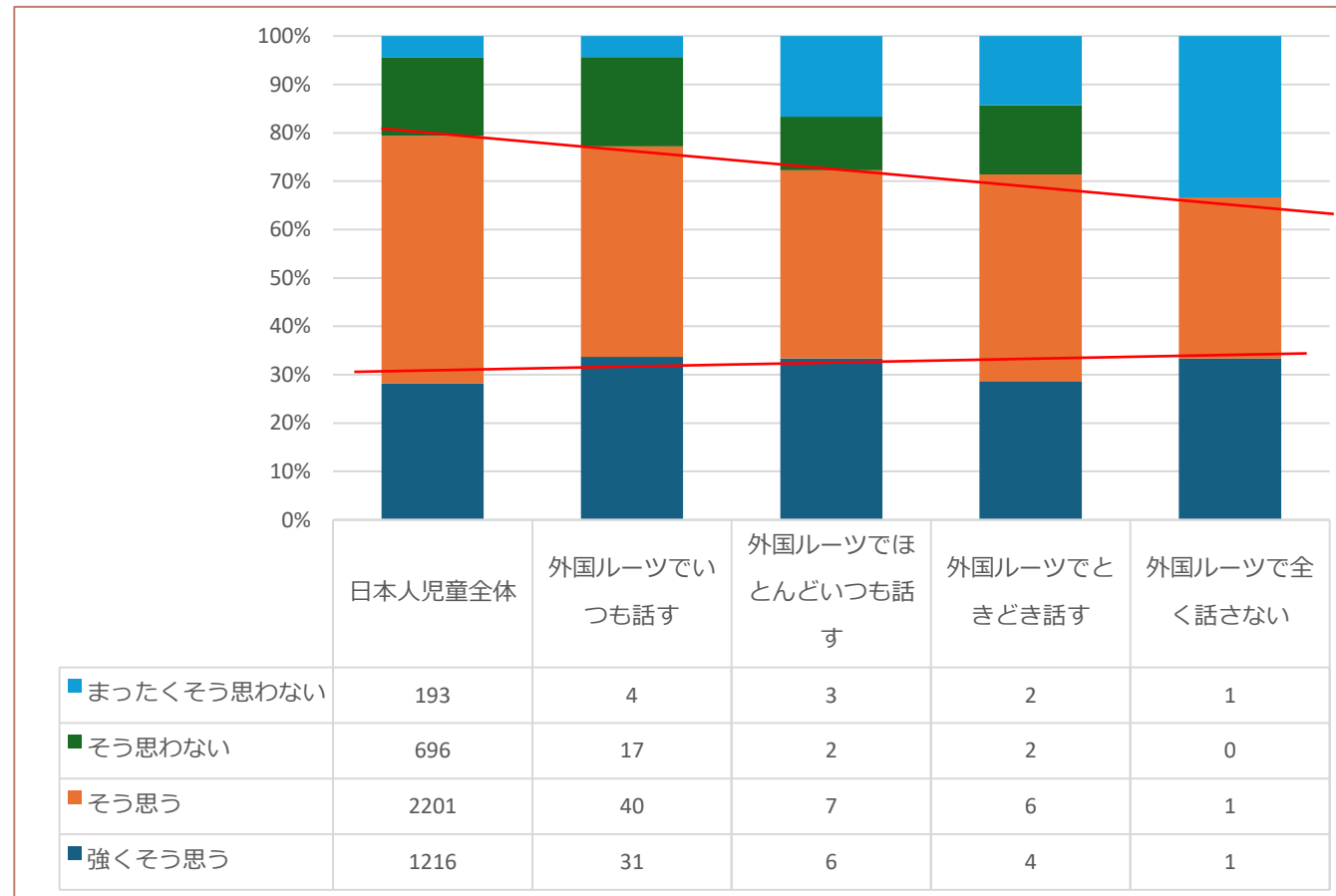


d) 先生はわたしに対して公平だ(Fairness 公平性)



国際数学・理科教育調査TIMMS調査結果 外国人生徒の包摂とWell-being 日本（参考）

- b) わたしは学校にいると安心できる (Safety 安心感)



国際数学・理科教育調査TIMSS 調査結果から得られる結論

- 家庭で学校の使用言語を話さない移民子弟（保護者が外国人）は家庭での学校言語の使用程度が低いほど、安心感(Safety)や帰属感(Belongings)、公平性(Fairness)を含むWell-beingが低下する。
- 移民子弟は、家庭での学校言語の使用程度が低いほど、教科の学力も低下する（市瀬2024）
- 移民子弟（外国人生徒）のみの環境であったり、非移民子弟（日本人生徒）とのインタラクションが求められない教室環境下では、学校言語を使用する機会は限定される。
- 学校と家庭を往復する中で、移民子弟（外国人生徒）が学校の使用言語（日本語）を学ぶ機会は少ない。

コミュニティへの主体的参画

東京学芸大学 先端教育人材育成推進機構 外国人児童生徒教育推進ユニット

日本語プログラム開発プロジェクト：高等学校における日本語プログラム 第2部 日本語プログラム例

<https://kodomonihongo.u-gakugei.ac.jp/project02/content3.html>

- ・ <実施例4> 市民性を育む日本語プログラム
- ・ 報告者：須藤聡子・青木由香（荒井学園高岡向陵高等学校）
- ・ 実施校の制度 課程：全日制 学科：普通科 単位履修の仕組み：学年制
- ・ 対象生徒：2年生 タイプA（滞日期間：1～3年程度）
- ・ 実施形態：少人数
- ・ 実施した科目：学校設定科目「キャリアアップ日本語」（2単位）
- ・ 担当者：日本語指導員（非常勤講師）（+本校教諭のサポート）

第31～58時 (28時間) ユニット5	<学校を変えよう> (1) 「もし、私が校長先生だったら？」(ワークシート)(2回) 仮定表現 (2) 要望の一つを選んで具体化し、提案書①を作る (2回)★ 「～たいです、～たらいいいと思います」「なぜなら～からです」「～ば、～に/くな ると思います」「たとえば～はどうでしょうか」 (3) 提案書①を提出する(2回) 提案書の表現を見直して表現を調整→提出 (4) 先生からのコメントをもらって読む(2回) (5) クラスの中で一つの要望(ハラル食品)にしぼり、食堂への提案書②を作るた めに、仕入れなどの方法(コンビニ)について調べる(2回) (6) 提案書②を書く(ワークシート)(2回) どうやったら伝わる提案書を書けるかのディスカッション (7) 食堂にアポをとる(2回) 自己紹介、依頼表現 (8) 食堂に提案書②を提出してプレゼンテーション(練習一本番)(2回) 食堂の人との話し合い(質疑応答→食堂の方たちが「ムスリム」「ハラル」につ いて何も知らないことがわかった) (9) ハラル食品のリストを日本語で作成する(2回) →食堂にリストを渡しに行く (10) ポスター作り(新しく食堂に置いてもらうハラル食品について、ハラルについて 等)(10回) →ポスター掲示(担当の先生に日本語で掲示の依頼をする)
----------------------------	---

コミュニティへの主体的参画 東京学芸大学 先端教育人材育成推進機構 外国人児童生徒教育推進ユニット 日本語プログラム開発プロジェクト：高等学校における日本語プログラム 第2部 日本語プログラム例 P.7 言語的手当て

<https://kodomonihongo.u-gakugei.ac.jp/project02/content3.html>

	め)を確認する		
展開 2	＜要望の理由・目的を言う＞ ・モデル文を使って文型の形 (「なぜなら～からです」)と用法 を確認する	・文型「なぜなら～からです」の導入・練習 ・実際に自分の理由・目的 を学習した文型を使って言 う練習→読む・書く練習	・必要に応じて語彙・漢字の指 導 ・必要に応じて「～ば、～に/く なると思います」「でも/しかし」 も導入
	休憩		
展開 3	＜具体的なアイデアを出す＞ ・モデル文を使って文型の形 (「たとえば～はどうでしょうか」) と用法を確認	・文型「たとえば～はどうで しょうか」の導入・練習 ・実際に自分のアイデア を学習した文型を使って言 う練習→読む・書く練習	・必要に応じて語彙・漢字の指 導 ・「～」部分に動詞がくる場合は 「の」が入ることを確認
展開 4	文章の組み立てを考える		・生徒の文を板書して、視覚化 しながら話し合う
	提案書を書く		・提案書の下書きとしてノート に書いたものを教師がチェック
まとめ	共有と相互評価 ・自分の提案書を読み上げる ・他の生徒の提案書を聞いて、 自分の意見を言う		

②学習指導計画

	学習活動	語彙・表現	指導上の留意点 教材など
導入	・前回のワークシート「もし私が 校長先生だったら」を振り返る ・「提案書」について知る		・ワークシートの内容を聞き出 す お互いの内容を確認する ・提案書ワークシート配布 ワークシート中のモデル文に 注目させ、意味・機能を説明す る
展開 1	＜要望を選ぶ＞ ・前回のワークシートから自分 の要望を一つ選ぶ ・モデル文を使って文型の形 (「V マス形+たい」「V タ形+ら いい」)と用法(希望、願望・勸	・文型「～たいです」「～た らいいと思います」の導 入・練習 ・実際に自分の要望を学 習した文型を使って言う練 習→読む・書く練習	・必要に応じて語彙・漢字の指 導 ・必要に応じてマス形・タ形の 確認

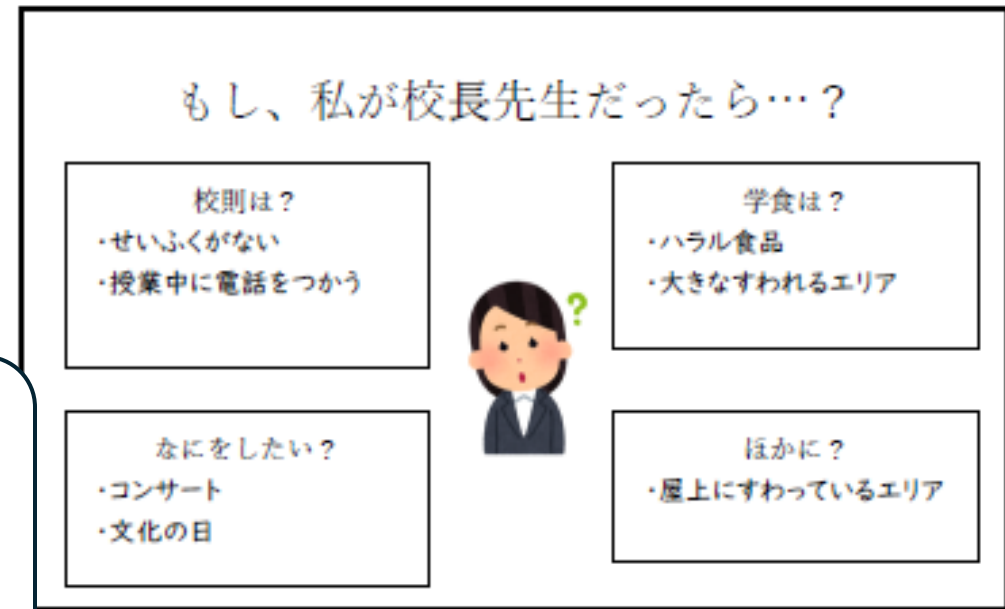
東京学芸大学 先端教育人材育成推進機構 外国人児童生徒教育推進ユニット
日本語プログラム開発プロジェクト：高等学校における日本語プログラム 第2部 日本語プログラム例
＜実施例4＞ 市民性を育む日本語プログラム

<https://kodomonihongo.u-gakugei.ac.jp/project02/content3.html>

(2) 授業の実際

生徒たちは、自分の提案したことで学校を少し変えることができるかもしれないというモチベーションで意欲的に参加できていた。どういう手段を使うと相手に伝わりやすいのか、またどういう日本語表現だったら自分の言葉として発することができるか、率先して考えることができていた。

自己肯定感（自己変革）
コミュニティの変革
シティズンシップ
AGENCY



<話し合い活動で利用したスライド>

ポスター作り
ポスター掲示

全校集会で発
言

生徒会が動く

要望が一部で
も実現

シティズンシップ教育 生徒会改革

コミュニティへの主体的参画
東京学芸大学 先端教育人材育成
推進機構 外国人児童生徒教育推
進ユニット：高等学校の日本語指
導・学習支援のためのガイドライ
ンp.90 事例 2 認定 NPO 法人カタ
リバ

https://kodomonihongo.u-gakugei.ac.jp/assets/M22_koko_nihongo_guideline.pdf

異文化間教育



認定 NPO 法人カタリバ
「みんなのルールメイキング」の取組から
みんなのルールメイキングー校則をみんなで考えるー

学校では多様な個性や背景をもつ生徒と教師が共に過ごしています。学校を多様な人々が寄り添って共に生きる場にするには、文化的背景が異なる人同士が対話を重ねながら、自分の「当たり前」を相対化し、互いの価値観を認め合ったり、新たな意味や規範を創造したりする営みが必要です。認定 NPO 法人カタリバ(以下、カタリバ)は 2019 年から、小学校から高等学校まで、「みんなのルールメイキング」の取組を続けています。その取組例から、多様な価値を学校で創造するとはどういうことなのかを考えてみましょう。

.....

「ルールメイキング」活動の実際

「ルールメイキング」は学校の校則・ルールの対話的な見直しを通じて、生徒たちが主体的に関わる学校をつくっていく取組です。校則を見直したり、変えたりすることが目的ではなく、生徒が自分たちの周りの校則を改めて考え直し、なぜあるのか、どうすべきかということを生徒同士や先生同士で対話を重ねながら、みんなの納得解をつくっていくプロセスを大切にしています。「こういうきまりである」という固定化されたものを見直し、多様な立場から意見を出し合いながらつくりかえていく活動です。今では、全国のような高等学校がこの取組を行っています。その中では、外国人生徒等も含む生徒たちや教師など学校全体で多文化共生を意識することにもつながるような、様々な気づきが生まれます。

(参考：認定 NPO 法人カタリバ みんなのルールメイキング HP「ルールメイキングとは」<https://rulemaking.jp/about/>)

〈生徒たちにとっての意味〉

①「自分たちの場所は自分たちでよりよくしていく」という意識の高まり

異なる文化を持つ外国人生徒等がいる場合、ルールにどう適応するかと、文化に馴染めるように支援するだけでは不十分です。ともに過ごしやすいように、学校のルールについて考えることが大切です。生徒が多文化共生のためにルールを変えられるという意識をもつことが、多様な価値の創造の第一歩となります。

東京学芸大学先端教育人材育成推進機構外国人児童
生徒教育推進ユニット
日本語プログラム開発プロジェクト：高等学校にお
ける日本語プログラム 第2部 日本語プログラム例
＜実施例5＞SDGsを学ぶ日本語プロジェクト

<https://kodomonihongo.u-gakugei.ac.jp/project02/content3.html>

- ・ <実施例5>
- ・ SDGsを学ぶ日本語プロジェクト（プログラムD）
- ・ 報告者：五十嵐恵美（愛知県立御津おおば高等学校）
- ・ 実施校の制度
- ・ 課程：全日制 普通科（国際類型、普通類型） 昼間定時制 普通科（普通類型、日本語類型）
- ・ 単位履修の仕組み：単位制
- ・ 対象生徒：1年
- ・ 実施形態：一斉授業、18人
- ・ 実施した科目：
- ・ 「特別の教育課程」による日本語指導科目「日本語IB」（2単位）
- ・ 担当者：日本語指導担当教員／外国人生徒教育支援員／日本語教育支援員

第41～46時 ユニット9 (6単位)	SDGsテーマ：質の高い教育をみんなに ★ ・質の高い教育とは何かを考える。 ・御津おおば高校で質の高い教育を受けるにはどうしたらよいかを考え、発表する。 【語彙・表現】 公平、質の高い／低い、公平、知識、技能、安全 「質の高い教育を受けられるようにする」「こどもはみな学校へ行き、勉強する必要がある」
第47～52時 ユニット10 (6単位)	SDGsテーマ：人や国の不平等をなくそう ・世界人権宣言（谷川俊太郎訳）を読み、平等とは何かを考える。 ・身の回りの不平等を見つけ、改善策を発表する。 【語彙・表現】 権利、平等、かけがえのない、制限 「人はみんな平等でなければなりません」「性別で判断してはいけません」「国籍や言語で差別されるべきではありません」

コミュニティへの主体的参画 東京学芸大学先端教育
人材育成推進機構外国人児童生徒教育推進ユニット
日本語プログラム開発プロジェクト：高等学校におけ
る日本語プログラム 第2部 日本語プログラム例
<実施例5> SDGs を学ぶ日本語プロジェクト

<https://kodomonihongo.u-gakugei.ac.jp/project02/content3.html>



主体性
自己肯定感（自己変革）
コミュニティの変革
シティズンシップ
AGENCY

(2) 授業の実践

① 生徒が作成した発表用のスライド

生徒の発表スライド

- ② 学校の規則をしっかり守る
- ②、全体生徒(日本人にも、外国人にも)は互い助けたいの雰囲気をもつ、差別をしない。
- ③、学習に対して、自分の最大限の努力をつけて、他者に助けたい、負けたくないの気持ちを持つ。

先生、学校はどうしたらいいか

- ①、全員の生徒に対して、できるだけ平等・公平に対応する、誰でも勉強られるの勉強環境が作るとよいことを求める。
- ②、勉強したい学生に対して、もっと多くの補習や試験を提供し、充実な勉強内容を提供する。

生徒はどうしたらいいか

- ①全員の生徒に対して、できるだけ平等・公平に対応する、だれでも勉強られるの勉強環境が作るとよいことを求める。
- ②勉強したい学生に対して、もっと多くの補習や試験を提供し、充実な勉強内容を提供する。

・学校はどうしたらいいか

- ①古いものを整理し、壊れたものを修理し、又は新しいものに入れ替える。
- ②給食などのサービスを提供する。

実践例



多言語交流の部活動「ONE WORLD（多言語交流部）」の取組 —ある高等学校の例—

外国人生徒等と日本人の生徒、大学の留学生とが協力して、毎週の交流活動、文化祭等に取り組みました。高等学校、大学、NPO の3者が連携してプロジェクトづくりをすすめ、ワークショップなどの体験活動を通して多文化共生の交流活動を実践しました。

外国人生徒等は、孤立しがちな学校生活のなかで、同じ母語を持つ生徒、英語を話す生徒が交流し、居場所として機能しました。日本人の生徒にとっても外国につながる生徒の母語や母文化にふれるとともに、多くの言語や英語学習の機会になりました。多様な背景のある生徒たちが体験活動や文化祭での発表を通して協力し合い、部活動のチームづくりの取組は、学校で多文化共生を体験し、将来への展望を実感できる貴重な機会になっています。

コミュニティへの主体的参画 東京
学芸大学 先端教育人材育成推進機
構 外国人児童生徒教育推進ユニッ
ト：高等学校における外国人生徒等
の受入れの手引P.55 クラブ活動

- 日本人生徒のクラブ活動（運動部などに加入する）
- 外国人生徒がコアとなって活動するクラブ活動を創る

コミュニティへの主体的参画 東京学芸大学 先端
教育人材育成推進機構 外国人児童生徒教育推進ユ
ニット：高等学校の日本語 指導・学習支援のため
のガイドライン p.47

https://kodomonihongo.u-gakugei.ac.jp/.assets/M22_koko_nihongo_guideline.pdf

- ・ 日本人生徒で外国人との共生、多文化をテーマに探究や課題研究を行う生徒は多い。日本人生徒と協働で探究活動を進めてはどうか？

事例

九里学園高等学校の取組 「想・創 まほらディア プロジェクト」



令和元年度から文科省より「地域との協働による高等学校教育改革推進事業グローバル型」に指定を受けています。その一環として「多文化共生」をテーマに探究学習を行っています。日本人生徒が、現在、在籍している中国籍の生徒に、日常での困りごとや文化の違いなど直接インタビューしたり、企業で研修生として来日している東南アジアの従業員の方に、防災対策のワークショップを市の防災課と連携し実施したりもしました。探究学習を行っている生徒たちにとって、多文化共生は当然の考え方となりつつあります。また、これ以前九里学園高等学校は 2015 年から SGHA（スーパーグローバルハイスクールアソシエイト）校としても指定を受けており、地元国立大学の留学生と一泊二日でワークショップを通して交流を行うグローバルキャンプや、短期、長期留学生の受入れを積極的に行ってきました。過去には、インド人学生 50 人の短期受け入れ（ホームステイ含む）や海外の提携校からの留学生受入れも行ってきたので、校内での異文化理解、多文化共生のイメージは身近にあります。

（本事業 2021 年度ヒアリング調査資料

https://www2.u-gakugei.ac.jp/~knihongo/chousa/upload/02_2_1.pdf）



コミュニティへの主体的参画 社会関係資本の活用

- スクールカウンセラー
 - スクールソーシャルワーカー
 - 放課後児童クラブ
 - NPOの主催する多文化クラブ
 - NPOの主催する短期のイベントやキャンプ
 - 地元企業のインターンシップ
- ⇒参加者みなさんの居住地でどんな活動が考えられますか？
-

社会的学習環境と高校生のキャリア形成：教員・支援者・保護者

- 以下の事例は宮城県国際化協会編「外国籍児童生徒サポート事例集～多文化な子どもたちの未来をひらくために～」改編
- s.s.さんは中学校卒業後に来日し、国際協会の日本語講座で日本語を学んだあと、**通信制の高校に進学**。
- 通信制の高校は、普段は学校へのレポート提出を中心にして学習を進め、スクーリング、試験を受けて単位を取得する必要がある。**学校に提出するレポートの作成を、支援者のサポーターの協力を得ながら進めた。**
- わからない箇所は、**スクーリングの時に高校の先生が丁寧に指導**してくれた。
- 母国の地元に日本の自動車会社の自動車製造工場があった。高校卒業後の進路は、自動車整備の専門学校で技術を身につけてT社の車を整備したいという希望を持っていた。
- **父親が専門学校の入試手続きを進め、**高校卒業後は、自動車整備を学ぶ専門学校に進んだ。現在は自動車メーカー系列の整備工場で働いている。

社会的学習環境と高校生のキャリア形成：クラスメート

- S.H.さん(日本／フィリピン出身)S.H.さんは日本生まれ。
- 約8年間を日本で過ごした後、家族でフィリピンに移住。小学校6年間、ハイスクール4年間という、当時のフィリピンの通常の教育を終えてから、16歳で日本に戻る。
- フィリピンでは大学に進学できる年齢だった、日本の制度上では中等教育の年数が2年足りておらず、大学に進むことはできなかった。
- はじめは専門学校か、高等学校卒業程度認定試験を受験してから大学へ進学すること、または就職することを考えていましたが、実際に高校を訪問し、授業や部活の様子を見学しているうちに、高校進学を考えるようになった。
- 最初に受けた自宅近くにある県立高校は不合格になったため、二次募集をしていた別の県立高校を受験し、合格。どちらの入試でも配慮申請をして、英語、数学、作文、面接の試験を受け合格。
- その高校は国際理解教育に熱心に取り組んでいて、異文化や英語に興味がある生徒が大勢いた。そのことはS.H.さんにとって大きな助けとなった。
- 学校の授業や部活動を通して、S.H.さん自身もグローバルな視点で物事を考えるようになった。
- 勉強にも引き続き熱心に取り組んだおかげで、成績も順調に伸び、推薦入試で公立大学に進学した。

社会的学習環境と高校生のキャリア形成：部活動

- C.M.さんは、中学卒業後に来日。国際化協会の日本語講座で日本語を学びながら、支援団体のサポートを受けて、教科の勉強をした。
- C.M.さんは**英語が得意**だったので、英語教育に力を入れている高校への進学を考えた。複数の学校を見学した結果、学校の雰囲気自分に合っていたことから、国際コースのある県立高校を目指す。その高校には複数回見学に行き、学校の先生方にその間の日本語能力の伸び具合を見てもらった。
- 受験の際には配慮申請をして、**英語、数学**、作文、面接の試験を受けて、無事合格。
- 持ち前の明るい性格も幸いし、充実した高校生活を過ごした。学校の先生たちは、「**C.M.さんが来てから学校の雰囲気が変わった**」とまで言われた。
- バスケットボール部に所属し、**対外試合でも活躍**。
- 勉強にも力も入れ、支援サポーターとの勉強を続け、大学進学を目指した。
- **AO入試で、私立大学に進学**。大学在学中も勉強やサークル活動に取り組むだけでなく、学外で行われたシンポジウムなどにも積極的に参加して発言するなど、自分の考えを積極的に発信した。

社会的学習環境と高校生のキャリア形成：探究学習

- O.Y.さんは、中国で通っていた高校を途中で辞めて来日し、私立高校に入学。
- 日本語はあまり話せなかったが、**学習意欲がとても高く**、授業の予習・復習を欠かさなかったほか、母国出身の先輩のアドバイスを受け、授業でわからなかった箇所を積極的に先生に質問することを心掛けた。
- 定期テストでは、国語、歴史には苦勞しましたが、**数学、英語、化学、生物などでは、毎回良い成績**を収めることが出来た。学校以外でもいろいろな方法で学習を進めた。日本語夜間講座、サポーターと教科の勉強をした。オープンスペースで自習中に知り合った日本人男性とも日本語の勉強をした。本人曰く「日本語の勉強と教科の勉強が同時に始まったので大変だった」。
- **理科、特に生命科学の分野**に関心が高く、顕微鏡や解剖用のキットを買い揃えて自分で釣った魚を解剖して**観察することにも熱中**。
- 医科薬科大学の生命学科に**推薦入試で進学を果たした**。毎日、ほぼ12 時間以上研究室で実験。将来研究者になることを目指して大学院に進学。

まとめ

- 生徒が周囲の社会集団の支援を受けるのみならず、その一員として相互作用的に関わり、問題の解決のために主体的に責任を持って行動できるよう、集団として取り組む課題と目標、活動の場と関係、課題達成のプロセスをデザインする。
- 仲間と活動に参加し課題遂行のために日本語（母語等）を使う。
- 他者・社会と関わり・問題を解決するためのことばの力を高める。

⇒支援者と非支援者（外国人生徒）との関係は、時によって入れ替わる。佐藤寛（2005）によれば、エンパワメントの最終目標は「既存の社会関係・社会制度の変革」とされる。

援助とエンパワメント（佐藤寛2005） 改編

